



情報提供によって実践することを目標に活動している」ボランティア団体であり、運営資金を補うため寄付を募っているということでした。仕事の上でお世話になっている方からの依頼であり、またこの組織の理事長とは旧知の間柄でもあったため、小額のポケットマネーを寄付させて頂くとともに、夫婦でこの組織の会員となりました。

以来、家内は「市民のためのがん講座」なども聴講していたようですが、私は名義会員を決め込んでおりました。このたび「NPO 法人がん患者支援ネットワークひろしま」の理事に推挙され、お引き受けいたしました。

私自身 50 歳代半ばのいわゆる成人病年齢にさしかかった現在、巷間で言い伝えられている「医師と弁護士と坊さんの友達は大切にしておくように」の名言を実感するようになりました。何時でも相談できるお医者さんと弁護士（お坊さんはともかく）が近くにいることは、本当に心強いと思います。「NPO 法人がん患者支援ネットワークひろしま」が全ての人々にとって心強い存在となるよう、微力ではありますが貢献して参りたいと考えています。

理事 長沼 毅

## ●がん治療の体験とボランティア活動

---

がんの全摘手術をして、9月10日で丸5年が経ちました。

私の「がん暦」は、アメリカの同時多発テロ事件と重なります。手術の翌日、まだ麻酔が効いてベッドの上でウトウトしていた時、ツインタワーに飛行機が突っ込む映像がテレビ画面に写し出されました。それが現実のテロであることが分かるまでにはしばらくかかりました。

ですから、ニュースなどで同時多発テロ事件が取り上げられるたびに、手術のことが思い出されます。今年で5年が過ぎたことになりましたが、残念ながら「無罪放免」という段階ではありません。

前立腺がんが見つかったのは、年1回の健康診断からでした。検査はJ病院でしたが、手術を受けたのは広大病院でした。ある方に紹介された泌尿器科の教授に相談したところ、「J病院には広大から先生が行っているのだから、写真などの資料はもらえるようお願いするから、安心して検査を最後まで受け

てください。」と言われました。

検査も終わり、J病院で最後の説明を受け、資料をいただくために家内と一緒に病院へ行きました。いくら待っても、先生から広大病院のことや資料のことが出ません。そこで、「広大の〇〇教授から聞いていただいていると思いますが……」と思い切って切り出したところ、先生の顔色が変わり、「はい、聞いています。」とつっけんどんな言い方で、資料を渡されました。お礼もそこそこに、病院を後にしました。

教授が直接主治医に話をして下さっていることですから、雑談でもしながら資料を受取ることを想像していた私たちは、ショックで二度とJ病院を尋ねる気がしなくなりました。

がんは初期の段階（B2期）でしたので、手術は成功し術後の細胞検査でも問題なしということで、「根治」と太鼓判を押していただきました。

と喜んだのも束の間、3ヵ月後から腫瘍マーカーの数値が徐々に上がり始めて再発。そして、2年後に放射線治療を受けることになりました。

放射線科の主治医が当会の廣川理事長（当時広大病院助教授）でした。この出会いから、当会に関わるようになったのです。

放射線治療の効果は大きく、2週間目で効果が表れ、マーカーの数値がドーンと下がりました。

週1回の放射線科診察で廣川先生と話す機会があり、このころ私はがん患者の経験を生かして、何か手伝いが出来ないかと模索していました。きっと手術前のJ病院の主治医の対応が、その気にさせたのだと思います。

教授自ら話しをして下さっている関係ですら、J病院の先生は冷たい態度を取られました。一般の関係の主治医に「ほかの先生に診てもらいたいのので、資料を出してください。」と言える人が何人いるのでしょうか。

治療の合間に話す廣川先生との会話で、がん患者さんを支援するボランティアがしてみたいという気が一層募っていったのです。

翌年（2004年）の4月、「がん患者支援ネットワークひろしま」が設立されることになりました。そして、その年の11月にNPO法人として認証を受けまし

た。2ヶ月に1回のがんの勉強会「市民のためのがん講座」、3ヶ月に1回の「がん110番」、年1回の「シンポジウム」のほか、「がん相談」も活動の大きな柱です。

私は今年3月までの2年間、事務局長を担当しました。事務局にかかるがん相談の電話を携帯に転送して受けて来ました。

がん患者さんからの電話やメールに対して、即座に応えることが大事なことだと考えたからです。この種の電話は「留守電対応」が多いからでしょうか、ナマで返事をするのに驚かれる方がほとんどです。

電話を受けて気がつくことですが、大抵の人がいきなりがんの病状を話されることです。話を聞いてもらいたい、悩みに悩んで電話をかけて来られ、言いたいことを一気に話されるからだろうと想像します。

がん相談で「傾聴」することの大切さも学びました。メモした内容を「カルテ」にまとめて、理事の先生方やカウンセリングの協力者にメールで問い合わせます。そして、その回答を相談者に電話で伝えるのです。

「セカンド・オピニオン」を勧める際に、「主治医に言い出せない」「資料を貸し出して欲しいと言えない」という方が多いのが現状です。そんな時に、「当会に入会したら、セカンド・オピニオンを勧められた」と第三者の「力」として利用することを勧めています。これは大変効果があるようです。

がん相談を通して知り合った会員の方の中には「お蔭様で無事退院しました。」という嬉しい電話を下さる一方、「その節はお世話になりましたが、1ヶ月前に亡くなりました。」という悲しい知らせを受けることもあります。その時には、仏壇に手を合わせてご冥福をお祈りします。

放射線治療後、わずかながら数値が上昇を続け、今年6月から前立腺がんの3番目の治療法である「ホルモン療法」を開始しました。今のところ治療効果が出て、こちらも順調に数値が下がっていますが、この治療は完治させるのではなく、当面「抑える」だけの治療です。私はこうして一生がんとともに生きて行くことになるのでしょう。

今や2人に1人はがんに罹り、3人に1人はがんで亡くなる時代です。こういう時代だからこそ、「先生にお任せします」ではなく、「市民のためのがん講

座」などで、がんの知識をしっかり身につけて、きちんと先生の言われることが理解できるようになっていただきたいものです。

そして、万が一がんになった場合には、「セカンド・オピニオン」だけでなく、「サード・オピニオン」も受けて、自分が納得いく治療を受けて欲しいと思います。

「がん患者支援ネットワークひろしま」に入会するメリットは何ですかと聞かれた時には、私は「安心感です」と答えています。

がんについて悩んだり、聞きたいことがあったりしたら、「いつでも気軽に相談できる会」、当会がそんな会になって欲しいと願いながら、理事の一人として関わっています。

理事 高野 亨



## ●Dr. 津谷の「がん患者の在宅療養は任せんさい」

今回は、「あなたの担当医を診断しましょう」と題して、お伝えします。

がん難民にならないために、私たちはいろいろな情報を得て勉強しています。私たちの「がん患者支援ネットワークひろしま」も大いに利用してください。しかし患者さんを取り巻く様々な人たちの中で、特に重要な位置を占め、大きな影響力を持っているのが、あなたの担当医ではないでしょうか。

先日、倉敷市「すばるクリニック」の伊丹仁朗先生とお会いする機会がありました。伊丹先生は、がん患者さんとのモンブラン登山や笑いなどによる免疫力強化の実践など、いわゆる「がんの三大療法」のみに頼らない、ユニークな活動をされている先生です。その中で、担当医と協力するためには、担当医の性格や資質をよく知らなければならない、とのお話がありました。

「医は仁術」の実践が本来の医師の姿です。しかし、現在では医学の専門性が進み、複雑な社会情勢の中でさまざまな医師像を見ることができます。今まで会った医師には以下のようなタイプがあります。

大学病院など研究機関で仕事をしている医師に多いのが「医は学術」というタイプ。外部から見ると患者をデータのモルモットとして扱っているとの批判もありますが、純粋に医学研究が究極的には患者さんのためになると信じている人もたくさんいます。

「医は技術」タイプ。彼らは研究で実績をだすより、実戦でテクニックを磨き身につけようとする、職人的な医師です。向学心の強い、熱心な若い医師の中にもよくみられます。手術、内視鏡、カテーテルなど外科内科系を問わず、高度な技術にあこがれています。

「医は芸術」タイプ。これは仕事自体、自分の趣味、楽しみと考えている医師。仕事でストレスをためないことは悪くはないのですが、患者が趣味の対象となっている場合もあり要注意。特に、技術に卓越し、地位、名誉がある程度あれば、この境地に達する人も多いようです。

「医は算術」説明は不要ですが、現在の医療情勢を考えれば、医師の良識ある経済感覚は必要でしょう。赤字になる経営状態では患者さんに還元できないのも事実です。

「医は詐術」タイプ。いわゆる「～をすれば治る」と断言し、高額の治療費が必要な医師。マスコミ、噂によって拡がっていきませんが、本来の効果が評価され、いずれ自然と衰退していきます。

さて、あなたの担当医はどのタイプですか？多くの医師には、上記のいくつかのタイプが混在しています。そして、状況や患者さんの態度によって、しばしば変化していきます。あまり一つのタイプに偏ってくると、患者さん自身が求めている本来の治療目的からかけ離れた結果をもたらします。冷静に担当医のタイプを評価し、注意しながら患者さんから担当医を教育していきましょう。

副理事長 津谷隆史

## ● 「がん患者さんのためのQ&A」

---

前回到引き続き、「がんそのものによるものでない痛み」についてです。

60代のTさんは、2年前に肺癌の手術を受けました。がんは取れた、手術は成功といわれ喜んでいましたが、傷がきれいに治った後も傷口の痛みが癒えません。主治医からは退院を勧められましたが、それどころではない激しい痛みでペインクリニックを紹介されました。

この方の痛みは、身体に「傷」がついた後の後遺症としての痛みでしたが、通常の鎮痛剤が全く効かず、オピオイドを使うようになりました。何とか退院できましたが痛みは消えません。痛みで悩まされるとどうしても「再発」の文字が頭をよぎります。このお正月は寒さのせいで痛みがひどく強くなり、食欲もなくなってげっそり痩せました。内科で検査を受けても、異常は全く見つかりません。対症的に鎮痛剤の増量と奥様の励ましで、春頃より少し元

気を取り戻し、現在はオピオイド鎮痛剤を飲みながらも以前の生活に戻りつつあります。

このように、手術の後に痛みの後遺症に悩まされることがあります。がんの手術の場合には、「がん治療による痛み」として広義のがん性疼痛に属しますが、実はがんでない手術の時にもあるものなのです。ただ、がんの場合はTさんのように「再発」の恐怖がつきまとい、精神的にも不安定になりがちです。

痛みに負けず（適切な治療を受けて）自分の生活、自分の人生を取り戻しましょう！

理事 藤本真弓

## ●共催したシンポジウムの速報

---

広島・ホスピスケアをすすめる会竹原支部が主催し、当会も共催した「シンポジウム“小さな町のホスピスモデル・竹原発”～安心して生きていける町～」が9月16日（土）の午後に開催され、盛会裏に終わりました。

前半は世良洋子さん（元RCCアナウンサー）と黒田裕子さん（日本ホスピス・在宅ケア研究会 副理事長）の「いのちの意味を考えよう」という題の対談が、後半は山崎章郎さん（ケアタウン小平クリニック院長）の「地域で生きる処方せん」という基調講演と、杉本由起子（前訪問看護ステーション竹の子クラブ管理者）による「小さな町のホスピス実践記」という報告の後、当会の廣川理事長の司会でパネルディスカッションが行われました。

開始時と終了時には雨も何とか止み、心配していた聴衆の数も、予想の500名を大きく上回る750名と大盛会でした。内容がとても良かったですし、雰囲気も優しい会であったと思います。

広島から手弁当で駆けつけ受付業務などを手伝ってくださった、当会会員の仲間の皆様、大変ご苦労様でした。

会員 吉本千鳥



## ●シリーズがん療養生活の基礎知識 AtoZ

### 在宅医のつぶやき⑱

今回は、9月15日付けの読売新聞の一面に、「終末医療初の指針、厚生省が原案」という表題で、以下のような記事がありましたのでご紹介します。

厚生労働省は14日、がんなどで回復の見込みがない終末期の患者に対する治療を中止する際のガイドライン（指針）原案をまとめた。治療の方針決定は、患者の意思を踏まえて、医療チームが行い、患者と合意した内容を文書化する。患者の意思が理解できない時は、家族の助言などから最善の治療を選択し、また、患者らと医療チームの話し合いで、合意に至らなかった場合などは、委員会を設置し、検討することが必要としている。終末期医療をめぐって国が指針を作るのは初めて。

終末期の患者について延命治療などを開始したり、中止したりするなどの治療方針を決める際、①患者の意思が確認できる、②意思が確認できない、のケースについて必要な手続きを示した。

①の場合は、医療チームの十分な説明に基づき、患者本人が意思を示した上で、主治医などと話し合い、その合意内容を文書にまとめた。文書作成後、時間が経過したり、病状の変化があったりした場合は意思を再確認することも求めた。

一方、②の場合は、家族の話から、元気だったころの患者の意思を推定する。家族がいなかったり、家族間で判断が割れる場合は医療チームが判断する。

いずれの場合も、医療チーム内で意見が割れたり、患者と合意できない場合は複数の専門職で構成する委員会を設け、治療方針を検討・助言させるとした。

〔ここからは私の独り言です〕

自分が死ぬときには自分らしく、人間らしく死にたいと思います。死ぬときにまで役人に管理されたくはありません。それにしても、在宅での看取りでは複数の医師の存在などまず有り得ませんし、委員会を設置することなど

も不可能ですから、この指針は在宅を対象外としているのでしょうか？  
以上、「在宅医のつぶやき（ぼやき?）」でした。

理事 田村裕幸

## ●会員からの投稿原稿

今回は、会員の佐藤さんから投稿がありましたので、ご紹介させていただきます。

### 母の「笑顔」に救われた

がんについての知識で迷いのない判断！

《 不能の語はただ愚人の辞書にあり 》ナポレオンのこの言葉は、これまで母が生きてきた理念であり、私たち子供へのメッセージでもありました。幼い頃より世の中には「できない」という言葉はないという、母の強い信念に随分勇気づけられてきたものでした。そんな私たち子供にとって、今夏に、予想もしなかった母の「がん宣告」に直面しました。

まもなく90歳を前にした母にとって、「なんと酷な仕打ちか」と驚きと悲しみが混在した思いが脳裏を駆け巡りました。しかも主治医から、本人に「がん」であることを伝え、本人が治療方法を理解してもらい、本人自らに治療法を選択してもらうという方針を告げられたのです。

母がいくら「がん」について勉強しているといえ、パニックに陥らないかととても心配でした。

そんな子供達の不安な気持ちをよそに、家族立ち合いのもとで、主治医から本人へ病状の説明がされることになりました。

主治医：「良いものではないことが疑われたので、細胞検査をしたら「がん」でした」

母：「それじゃあ、持っていけばええんですね」

主治医：「どこへですか」

母：「あの世へ」

家族一同：「まあ、母さんたら・・・」深刻だった部屋の空気が、大笑いによって一気に和らいでいきました。

それからの説明も、母は殊のほか冷静に受け止めていたようでした。目をしっかり見開いて、主治医の先生の目を見て、一言一言うなづいて聞いている母でした。

「ここまで、分かりましたか」と語りかけられる主治医の先生に、「よく分かりました。自分の身の上がよく分かりました。」曲がった背骨が、心なしか伸びていました。

ここまで母を冷静沈着にさせるものは何だろうかと考えてみました。思えば元気なとき、廣川先生の「がん講座」を定期的を受講して、皆勤賞をもらったことを、とても誇りにしていました。そして、ずっと年下の受講生仲間の支えもあって、勉強を続けてきたことで、今回の「がんの発病」という主治医の先生の説明を直視でき、今自分の置かれている立場も受け止められたと思わずにはられません。

母と一緒に勉強してきた私も、これからも「賢い患者」になるべく、健康な時にこそ知識を得て、もしもの時に正しい判断ができるよう、自分の体は自分で守っていきたくと改めて思っています。

「えらい、えらい言うて、よう褒めてくれるが、何がえらいんかいのう。」と、笑いながら母が問います。

体を起こすのにも力がいるのに、「次は、どうするんかいの」「こうかいのう」「これで、ええんかいのう」と、何べんも確かめながらやろうとする気持ち、意欲がすごいと思います。根性があることを褒めると、「人間、できんこたあ、なあんで。自分のことじゃけんの」と、にこやかな笑顔を向けてくれる母でもあります。

「がん」の宣告を受けても、「くつろいだ、よかった、よかった」と、ニコニコしたこの顔、この母の笑顔を大事にしたいと思います。母の笑顔に救われた一歩でした。

会員 佐藤千萬子

## ●広島県内のがん関係イベント情報

\*\*\*\*\*

### ○平成18年度第3回「市民のためのがん講座（全6回シリーズ）」

テーマ：「血液がん治療の進歩」麻奥英毅（広島赤十字・原爆病院）  
「リンパ腫の基礎知識」廣川裕（当会理事長）

日時：2006年9月30日（土）午後2時～4時15分

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ 北棟 6F  
広島市中区袋町6番36号（袋町小学校の隣）

TEL：082-545-3911

いつもの「広島市中区地域福祉センター」ではありませんので、ご注意ください！

受講料：当会会員：800円、協力団体会員：1,100円、一般：1,300円

問合せ先：当会事務局（TEL：082-289-0610、E-mail：info@gan110.rgn.jp）

### ○第39回緩和ケアを考える会・広島 定例研究会

テーマ：緩和ケアにおけるリハビリテーション

講師：大田仁史（茨城県健康プラザ）

日時：2006年9月30日（土）午後2時～4時30分

場所：広島国際会議場・ダリア

### ○ピンクリボンフォーラム2006

「女性なら、誰でも気になる、乳がん・子宮がん」

講演Ⅰ「乳がんを知ろう」：桧垣健二（広島市民病院）

講演Ⅱ「子宮がんを知ろう」：永井宣隆（安佐市民病院）

トーク「乳がん・子宮がんと告げられたら」

パネルディスカッション「乳がんって？」

日時：2006年10月1日（日）午後1時～4時

場所：中国新聞ホール（広島市中区土橋町7番1号）

主催：乳癌患者友の会きらら、婦人科癌患者友の会うらら、女性と健康を考える会、中国新聞社、ひろしまPステーション76.6FM

（すでに聴講希望者多数のために、新たな希望には添えないようです）

## ○第16回広島がんセミナー県民公開講座

テーマ：がん患者の心と生命

講師：山脇成人（広島大学精神神経医科学）

浜中和子（のぞみの会）

日時：2006年10月21日（土）午後2時～4時

場所：広島国際会議場 地下2階「ヒマワリ」

参加費：無料（事前登録要）

主催：財団法人広島がんセミナー

## ○合同講演会

テーマ：思いやりの医療を探してーおげんきクリニックの試みー

講師：岡原 仁志（山口県大島郡周防大島町 おげんきクリニック院長）

日時：2006年10月28日（土）午後3時～5時

場所：尾道市総合福祉センター4F大会議室

（尾道市門田町22-5）TEL：0848-22-8343

参加料：会員は無料（非会員は500円）

主催：尾道・生と死を考える会、乳腺疾患患者の会・のぞみの会

## ○平成18年度第4回「市民のためのがん講座（全6回シリーズ）」

テーマ：「がん免疫療法はどこまで進歩したか？」

山口佳之（広島大学病院腫瘍外科）

「代替療法ってなに？」

廣川 裕（当会理事長）

日時：2006年11月25日（土）午後2時～4時15分

場所：広島市中区地域福祉センター（広島市役所の向い側「大手町平和ビル」）

受講料：当会会員：800円、協力団体会員：1,100円、一般：1,300円

問合せ先：当会事務局（TEL：082-289-0610、E-mail：info@gan110.rgn.jp）



## ●編集後記

---

ニュースレター第18号はいかがでしたでしょうか。

「がん対策基本法」立法化されたことにより、がん対策はわが国の重要な課題であると位置づけられました。「居住地域にかかわらず適切な医療が受けられる体制の整備」や、「患者本人の意向を尊重した医療提供」という、当たり前でありながら実現が難しかった「がん医療の基本理念」が、看板倒れにならないように期待したいものです。

がん患者と医師・病院との積極的な意見交換や交流の中に、がん患者を取り巻く環境が好転する糸口があるものと思います。

引き続き、会員の皆様からのご意見、ご質問等を募集しております。是非、下記のTEL&FAX番号、又は電子メールまでお気軽にお寄せください。

---

■発行者： NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま 事務局

URL : <http://www.gan110.rgn.jp>

■連絡先： E-mail : [info@gan110.rgn.jp](mailto:info@gan110.rgn.jp)

TEL : 082-289-0610 FAX : 082-289-0569

■Copyright： NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま

このニュースレターは、当会の会員に配付しております。

当会の活動を充実させるため、入会希望者のご紹介をお願いします。

---

---